

東  
新  
春

東 京 圖 書 館

東 京 圖 書 館

|        |                  |        |        |   |   |
|--------|------------------|--------|--------|---|---|
| 一<br>冊 | 一<br>七<br>三<br>号 | 六<br>架 | 八<br>函 | 屬 | 類 |
|--------|------------------|--------|--------|---|---|

一  
九

古  
道  
或  
問

全

東  
京  
圖  
書  
館



東京圖書印

東京圖書印

古道或問端書

古道或問端書

比登日肥乃道能口乃人柴田翁乃著

礼多流書一卷袁其真名子乃馨守

兄令見良禮祁里執看流迹彼殊迹設

而在或問乃屬奈良泥改禮類

大御代能御證斗揭亦在御制

札乃大御令能只三行奈留我漢語

鐫印局



奈流乎惶久毛以布可斯美麻禰波比  
氏漢習波牟可登問祁流迺答良禮多  
類那里氣理竝氏乃丑人母然留宇多  
我比有毛耶須流斗宇之呂米多可流  
袁利之母如是正岐答丑良禮多類波  
許與奈岐翁我賜物也氣理此書與斯  
在問言丑牟人波更奈里阿加登幾志

良奴痴學乃徒廼爲尔母善岐目佐麻  
斯草奈羅麻志登先取阿弊受學問乃  
祖奈流大學大博士平田大人乃御許  
迺窺侍里之尔是者實迺善書奈里疾  
久

官迺聞在世上櫻木迺花咲世譽登宜  
比於古世給比祁禮婆耶我氏兄迺言



獎米天其多婆可里須流由唯阿利迓  
一言云不波崑崎長也

明治三年登云不年乃五月

古道或問

或問 明詔の聖旨を奉躰忍いて本學找純一ホムガクに可學心得勿ベキマテフコロエ論の儀小いへ共御變革御高札の第一條に入ダイイチヂョウとる者五倫れ道ミチを正ただしくむべし事第二條に鰥寡孤獨廢疾の者モノを可憫事と有之右五倫鰥寡ふと云ふ文義漢籍の學問ガクモムあらでる會得エトク致イタシのとかるイるカク御高札を教化カウクワの基本キホンにいへば天下れ衆庶シユシヨ小先漢學を御勸導被遊シムシヤウい事と覚申オホエい且ツ皇國クワウコクの上古五倫鰥寡ふと云ふ事ハ文字モジど小無却座ムシヤいへば其道理ダウリ找知シ行オコナふ者キムシウ有之末オホじ九キムシウ只禽獸同然乃動作フルマヒをヒツキヤウレイセツれして世ヨを經ヘい様ヤウ小思オモむヒ然シまバ本學古道ふと申ヒツキヤウレイセツえ畢竟禮節ヒツキヤウレイセツを知らぬ



上代の事ナラ小倣ガクモムいひ學問キコのやうに聞え申キソクい。左様キソクも規則キソクもあ  
き學問を致キソクいたんとて人倫ジムリムの道ミチれ教法ケウハフ不欠カムケツ闕ケツあゼムビく善義ゼムビ茂  
盡ツクしカムガクとる漢學マナを學カクびカクい方可ル然申聞ハウユウい朋友ユウユウも御座ニエい故彌疑イヨクキ  
念ネム相起コノゴロりタイマムいて頃日タイマム々怠慢ネカ仕ゴジケウい願ケツシムくハ御示教キムガクの上決心ケツシム勤學キムガク  
致キムガク多キムガクくキムガクい

答コタフ近來キムライ寒郷カンキョウ僻邑ヘキイフ小至シユセキると手跡テシナム指南シシヤウ法師シシヤウ匠有シシヤウる四書シシヤウの素讀ソドク  
くケウジュらケウジュるを教授ケウジュ致ケウジュいゆモジ急ギリ文字モジ乃義理ギリ大母聞ヒラけ五倫ヒラの道理ヒラ懇  
寡孤獨カウシヤクの講釋カウシヤクおどアラマシ荒增聞アラマシ知らアラマシ急アラマシものも無レシヤウ之情狀レシヤウを御諒リヤウ  
察サツ被爲有ワツカる纒シヤウ三章シヤウに約ヤク志カウクワて教化ゼムタイの全アゲ躰アゲ茂舉アゲさせ玉キふ難キ有  
獻ネイ旨シよスベいスベたスベむスベやスベ總スベて法令カフレイと簡易カムイあるを貴タラびタラい事故タラふて全タラ

學問ガクモムは和漢ワカン茂分ワカちワケい譯ワケしてワケも無レシヤウ之レシヤウい。又上代ウヘノヨ尔五倫ヒラあど云  
ふ文字キムジあまゆ急キムジ人ヒトの行業キムジは禽獸キムジ小等ヒトしヒトの里ヒトしヒトと思ヒトひ玉ヒトふ  
よし誰タレも左様サマの疑問ギモンを申事シムコトにいヒト共ヒトをヒトまヒトと國典コクテンを御熟覽シユクラン  
無レシヤウ之故コトは御疑念ギネムよヒトて抑人オスを産靈神ムスビノの賦與フヨし玉ヒトふ靈妙レイミョウ也  
性セイを稟得ウケエて生ウマまイッ出イッる之ヒトのゆ急スベ不識ズシラ不知ズシラ順帝ジュンテイ之則ノリ道理ドオリ有ヒト之  
五倫ウゴの道ミチを自オツカら身ミに備ソナり申シい末ハ終ハ  
天照大御神アマテラスオホミカミの廣大クラウタイある御仁德ジムトクを申シも更サラあサラる  
諾冉ナギナミ二尊ニソムの御唱シヤウワ和ケイモムら閨門ケイモムの大ナギナミ礼ナギナミ

神代紀カミヤマトキよカミヤマトキスナハチオノゴロカミヤマトキジマヲクニナカノミハシラカミヤマトキ  
トシカミヤマトキテイザナギノミコトハヒダリヨリメグリイザナカミヤマトキ



ミノミコトハミギリヨリメグリクニノミハシラヲ  
神 右 旋 国 柱  
 カレメグリテアヒマセル片ニイザナミノミコトマツ  
分 巡 會  
 アナニヤシエヲトコヲトノリ玉ヒキイザナギノミコ  
意 哉 可美 男  
 トヨロコビ玉ハズテノリ玉ハクアハヲトコニシアレ  
不 悦 日 吾 男  
 バマツトナフベキヲナゾモヲミナノコトサキダチツ  
先 唱 如何 婦人 言 先  
 ルカレサガナシメグリナホレナモトノリ玉ヒキコ  
故 不 祥 改 旋  
 ニフタバジラノカミサラニメグリアヒマシヌコノタ  
ニ 神 更 相 遇 是 行  
 ビハイザナギノミコトマツノリ玉ヒキ云ニ  
先 唱

と有之天地亦法<sup>イコト</sup>て女を男<sup>オメヲオト</sup>先立<sup>マツル</sup>をのら<sup>オノ</sup>慈道理<sup>オホシロ</sup>早く神代  
ソナハに備<sup>ソナハ</sup>記<sup>シ</sup>申<sup>シ</sup>ひ又君子之道造端<sup>クムシノミチハナシタムラ</sup>乎夫<sup>ウウフニオホシクシノイヒヤアキカ</sup>婦<sup>メ</sup>及其<sup>ト</sup>至<sup>キ</sup>也<sup>ナリ</sup>察<sup>サツ</sup>乎<sup>カ</sup>天地亦<sup>ツチノチ</sup>と  
ダウリハヤ

云<sup>イハ</sup>ふ語<sup>コト</sup>意<sup>イ</sup>小<sup>コ</sup>も自<sup>オノ</sup>ら<sup>カ</sup>協<sup>カ</sup>ひ可<sup>カ</sup>申<sup>カ</sup>ひとん<sup>カ</sup>の  
オノカ カナ

須<sup>ス</sup>勢<sup>ゼ</sup>理<sup>リ</sup>姫<sup>ヒメ</sup>の詠<sup>エイ</sup>歌<sup>カ</sup>も貞<sup>テイ</sup>操<sup>サウ</sup>の真<sup>シン</sup>情<sup>ジヨウ</sup>  
スゼリヒメ エイカ テイサウ シムジヨウ

ヤチボコノカミノミコトヤアガオホクニヌシコソハ  
八 千 矛 神 命 吾 大 国 主  
 ラニイマセバウチミルシマノサキガキカキミルイソ  
男 在 打 見 島 埼 搦 見 磯  
 ノサキオチズワカクサノツマモタセラメアハモヨメ  
埼 不 落 若 艸 妻 令 持 吾 女  
 ニシアレバナヲキテヲハナシナヲキテツマハナシ云  
有 汝 置 男 無 汝 置 夫 無  
 云

押<sup>オシ</sup>日<sup>ヒ</sup>命<sup>ミコト</sup>の言<sup>コト</sup>立<sup>タテ</sup>は忠<sup>チウ</sup>臣<sup>シン</sup>は龜<sup>キ</sup>鑑<sup>カン</sup>  
オシヒミコト コトダテ チウシン キカン

上<sup>ウヘ</sup>畧<sup>リョク</sup>ウミユカバミヅクカバネヤマユカバクサムスカ  
海 行 水 漬 尸 山 行 艸 生  
 バネオホキミノヘニコソシナメカヘリミハセジ云ニ  
尸 大 君 傍 死 願

古道或問

〇三



通々杵尊の鴻業を大地球中無比の大孝。

アマテラスオホミガミアマツヒコヒコホノニギノ  
天照御神天津彦彦火瓊杵  
ミコトニヤサカニノマガタマヤタカバミクサナ  
等八坂瓊曲玉及八咫鏡  
ギノツルギミクサノタカラモノヲタマハシ云ニアシ  
薙劔三種宝物賜  
ハラノチイホアキノミヅホノクニハアガミコノシラ  
原千五百秋瑞穂国吾子孫可  
スベキクニナリミマシマノミコトユキテシロシノ  
玉地也尔皇孫就治  
セアマツヒツギノサカエマサンアメツチノムタト  
コシヘナルベシトノリ玉ヒキ云ニ  
天壤與  
如此神勅を奉じ玉ひて万古一系は皇統を傳へらむ  
神孫之を保じ御代に其徳を聿べ脩らむ更他無比を

き國有らざる事を申さも無之

神八井耳尊の自ら懦弱して御弟神瀆名河耳尊を天祚を讓

を玉ひ億計尊も御弟弘計尊に讓らせ玉比

垂仁天皇の御后狭穗姫尊注 天皇尔忠御兄狭穗彦王に

義を立玉おて稻城の中に焼死し玉ふと皆兄弟の友愛

味鉏高彦根命は天若彦の喪を吊ひあふて朋友の信義

アメワカヒコアシハラノナカツグニアリシ片アヂ  
天若彦葦原中津国味

スキタカヒコネノカミトウルハシカリキカレアチス  
鉏高彦根神友善故

キタカヒコネノカミアメニノボリテモヲトブラヒ玉  
天友上喪弟

フ片云ニトモガキハアヒトフベキモノゾトオモヘバ  
之友道理



コソキタナキモイハズテカクミヅカラトホクキツレ  
織 自 遠 來  
云こ

神皇產靈神の少彦名命小大汝命と心を協せて国土を經營  
せと命令有しを以二神義兄弟の契我結び玉比し朋友  
の交宜は最親と云所ある斯五倫れ道も漢籍未渡來とざる  
以前御實行の上に備え有る事おて神代も堯舜已前ある  
る九に其餘猶 皇神多ちれ御行跡を委く尋奉らば今日人  
倫の行ふ牙交道も協した事ども數多可有之い鈴屋翁の  
歌り

世のふるみ有る趣と何事も神代の何とを尋て知らゆ

と詠まひ然に忠孝仁義は名目おけれ道も宗おと  
ふ者あると已事を得ざは末終道哉道とをるにいとせ  
王陽明が天下之大乱由虚文勝而實行衰也使道明於天  
下則六經不必述刪述六經孔子不得已也と云ひしおて  
も可覺知事にい

問 皇神は御上おて偶左様は御德行も可有御座いとん  
おまど正志と書籍の上に教導と云ふ事無之いへむ凡ての  
人類をおは禽獸は作業有しやうに思まひ

答 六神又御尤は御問より抑教と云ふ言の義と愛へと云  
ふ夏ふて氣稟物欲小引きて曲直を行ふ世の人類を 天津



神代御愛憐遊むさほる、餘りに吉事の方子赴のしゑて悪  
事あらせぬやう穢を祓ふと云ふ教哉定め玉牙るを申ひ此  
穢といふ言の本を氣枯と云義小て外身の穢は美あらば内  
心の息枯字戒免ぬひ直日神の御靈幸ひて身心ともに正  
直ふま潔呼息天地小充滿をるを枉津日神の邪業は相混り  
て心に慊らざる行ひ何まむ忽穢を餒虧ふ仮も餒虧ふ更  
れ事れを浩然ふる息天地の間小充塞はされむ穢祓の二言  
と神代の自らあは令にてい  
後小種を法罪穢を擧て祓ふを仕業哉書記されたる  
が即今の中臣祓詞よてあまぞ令の権輿とも可申ひ

又 崇神天皇の御代導民之本在教化也とて四道も將軍哉  
遣て未從服をぬ因に我教化せさを玉ひしも儒教の渡ら  
ざる已前小いを五倫五常あど、いふ名目を立たる教も  
と有らて惟神の令穢を祓ひ邪惡何らせ怒訓導にてぞいを  
哉

斯と 應神天皇の御代も漢籍渡來せしが惟神の令と  
違ふ事あき人倫は道哉押廣めと依義理精微あるを賞  
譽し玉比追と御採用有らせられて終も大寶養老哉經  
て律令格式あど撰述せらま、天朝の御政躰天下法刑  
法束ぶ御變格有らせらる、是亦時世の勢ひ小てい



問。左様小神代とて教も起り罪穢祓除の法あども定め有  
之い小 天皇乃御上おて御兄弟姨姪とも根に婚媾あら  
せらるゝと最重支罪穢ふてたいたせや。

答。太宰春臺が聖學問答辨道書紫芝園漫筆親族正系等に  
左様の狂言茂吐露せしとて其黨の俗儒専ら賜言とる事  
ていふ鈴屋翁の玉櫛笥長瀬直幸は上古嫁娶弁平田翁の西  
籍慨論あどに悉小弁に有之い故其書共を御披閱有度支に  
い惣じて禮制備らざる上世の支と各國ともに曖昧ある物  
めて後世をり想像せると違ふ支も可有之い。  
漢土小ても周以前を根ある事の多支ハ更にて周以

後小ても諸候あどおぎへ奸淫乱行多く有之支小い抑  
漢土を朝秦暮楚と姓を變牙世を異小しい故善惡得失  
議論剴切忌憚らばい牙ども。遠津神視津神と奉尊崇

天皇は御上茂公然と奉議い事ハ無勿躰恐多支支にい  
魯昭公同姓吳國の女を娶てしも孔子を禮知とて曰  
ひ又惡居下流訕上者とも曰礼記の文も居其朝不  
謗其大夫とけへ相見えい牙ば返とぐも 天皇の御  
上をむ避憚て奉る支き支にい。

右小申し先摺弁論の書ども御披覽までの間御心得乃  
爲歿申いたん上古臣下は女皇后母立を玉ふと云支れ



くぬニムトク 仁德天皇乃石之姫イノノヒメ一柱ヒトハシラは美ミ以ヨのある事コトか  
葛城カサキ曾豆比古ソツヒコの女メにして皇后ミケ小立玉コタテタマひハ事コト鈴屋翁スズヤウヨ乃  
歴朝詔詞レキテウセウシ解カイ引ヒキて臣シは女メにして皇后ミケに立玉タテタマ牙キバは是  
とト外ソトに有アルるル更マシあハし彼漢国カノカラクニのたタゞり同姓ドウセイ我キ嫌キひて王ミコ  
が心ココロに任マカせて卑賤ヒセム乃者ナニの女メをも皇后ミケと云イハふハるル俗ナシ  
とトもモいハこノいハ異カれハるル有アルるル大寶オホホの令ミコトノも多オホクく漢土カムトは制セイ  
尔シもモらレれルぬルもモ妃ヒメをシらシ猶ナホシム親王シムワウあラるルでテもモ玉タマをシぬル制セイ  
もモ多オホクく妃ヒメ二ニ貞イム四シ品シホム以上イジョウと有アルて臣シの女メを夫人フジン以下イジョウおシて品シホム  
とトいハるル位イと有アル云イハふハとトいハるル又マタ 皇女シロウメ我キ臣シ下シタに賜タマふル  
流事ユルコトもかカはハて無ナシ之ノ事コトもモて繼嗣ケイシ令ミコトノも臣シ娶メトル五世イハヒ王者オホス聽キと

有アル之ノ 主上ヌシノミを出デて五世イハヒもモ般ハらシるル玉タマふハをシ娶メトルるル更マシ我キ許ヨクまス  
るルが其後キノチ此御制コノミツメ也ナリ、ゆゆ流ユれレて日本紀略ニッポンキリョクも延暦ニョウリョク十二  
年九月丙戌ニッポンキリョクの詔ミコトノも見任ミタテ大臣オホシ良家ヨシカ子孫コノミ許ヨク娶メトル三世イハヒ以下イジョウ但タ  
藤原氏フナハラウヂ累代ツラナヘ相承ソウジヤウ攝政セツセイ大臣オホシ不絶フタヘ以ヨ之ノ論ロ之ノ不可イナク因等イントウ殊可コトニ  
聽娶キコメトル二世イハヒ以下イジョウ者モノと有アルるルも然サむルのコト 皇胤ミコノミを重オモこス  
せセさせ玉タマひハるル古コへノのキまマ我キ思オモひハ弁ワカふル事コトもモいハさ  
流故ユルコトを以ヨて大寶オホホ養老ヤウラウの御制定ミツメらシるル已前イマヘハ異母イボ御兄ミケ  
弟ニとして御腹ミハラのかカたタらシるル玉タマふハをシ御婚ミコン媾コウあるルも稀マレもモ相  
見ミえハ御姨ミバ御姪ミメもモ皇后ミケもモ立タて玉タマひハるルも有アル之ノ更マシも  
いハ猶ナホシム此更コノマシも 天武天皇テンブテウ大友皇子オホトモミコの御上ミカミ小治コヂ後ノチて可コト申マシ



事有之いへむ壬申乱標釋と云ふ書茂編て悉く述置い  
草稿を入貴覽可申い。

素り神典を四書六經あど乃如く人を教導をむる爲小作設  
けざる物ふて無之神代の正傳天壤無窮の神勅の如く萬  
古一系れる 天皇の御系譜よて其臣民よる者乃奉載尊信  
して讀ぎまむかあむざる事にい。

頼山陽も鴻荒之事和漢同然而不論可矣雖然祖宗之所  
源始亦臣子之不可不知者非如漢人之語軒羲と申い牙  
む各賢進を止て天下の爲よ勤學研究をべき時りいと  
む也。

御宸翰も 朕徒尔九重の中に安居し一日の安茂偷  
こ百年の憂を忘る、時を遂よ各國の凌侮茂受上り  
列聖を辱れ奉て下を億兆茂苦みん事を恐る故り。

朕あに百官諸候と廣れ相誓い、列祖乃御偉業を繼  
述し一身の艱難辛苦を問て親ら四方茂經營し汝億兆  
を安撫し遂尔萬里の波濤茂拓開て、國威を四方に宣  
布し天下を富岳の安ふに置ん事を欲と遊むと云ふ  
御仁惠乃 宸衷茂奉敬承いの學問の肝要のと覺申い

礼記小君子論撰其先祖之美而明著之後世者也云に其  
先祖無美而称之是誣也、有善而不知不明也、知而弗傳不



仁也此君子之所耻也。と有之いへむ。地球第一乃 皇天  
祖宗は神典を不知不知乃美あらば周以後の礼違ふ  
とて大寶以前の御制を議し却て 御稜威を賤し奉ん  
とあるを君臣の大倫を乱る不明不仁學者の耻を事  
にいたせや。

問。上件ケムの御答よて 皇朝上古乃道の本源五倫の道も自ら  
備て有る事又祖宗の原始を所知らでかあたざる所謂  
おとも略承知仕は然るに律令格式を始免六国史おとも漢  
文も記載有之いへむ初めて國典を讀いとも義理通曉し  
難の流牙くいえんか依之末に漢籍を讀て文字乃義理明ら

のよ成い上ある國典を讀い方可然也いえん此得失承度い  
答。文字の義理も通達せん爲のこれらに修身齊家治國安  
民は聖經にいある先漢籍を熟讀致い支勿論の義い乍然  
倭魂を固めてして異邦の書戎讀いた甲冑を着せを忘て戰場  
に向ふも等し文由鈴屋翁論さる初學乃者誦讀をべき書  
籍の次序を初山帝こと云ふ書小示されい平田翁父子もそ  
れらの支戎懸念せらる倭心戎漢文小編さる書ども數多上  
木せらるい。

程明道曰釋氏之說若欲窮其說而去取之其說未能窮已  
化而爲佛と漢籍も化せらるて自國の貴を戎知得ぬも



同日に論ロム小キムライヤソケウ。近來キムライヤソケウ耶蕪教キタマツク我窮盡ロムバして論破ロムバせんを以て  
人我諫イサて「以ヨのあらん道ミチのさ末マを」と多タく見ミる也。横ヨコさ  
り後ノチどふ始ハジメあるらむと申聞ウケい。

問オウコム。方今オウコム本居氏ホンケウシの學風ガクフ大オホに行イダをまマいハる。此人コノヒト猥シタに聖人セイジンを  
誹謗ヒハウし儒教ジュケウを排斥ハイセキせる僻ヘキ阿アに依ヨリて其門カドを入イるも法ホウを至極シゴク  
人品ヒトガラフアシ悪アクく相成アヒひをシ。既スデ尔ニ御答ミコタの如ノ。漢籍カンキヤク我讀クを敵陣テキジン小  
向ムカふカ如ノしと云イひコるニ。其心ココロ底ソコ明白メイハクい。他ヒ我誹謗ヒハウを  
むオシ己マタ亦ヒ誹謗ヒハウせらるル。是天理テンリよイをビ也。誹謗ヒハウ我受ウケひを即ス其  
身ミの穢ケガレ小オソカて自オソカらある神代カミヤウの令リヤウにも戻モトりハはビ也。  
答コタヘ。そまト本居ホンケウ翁湯武放伐トウブハウバツの皇國カウクニ小害ガイあるヲ我直ナホビノタマ日靈ニチレイ

と云ふ書我編アミて強ツヨクく論弁ロムベムせらるル。其頃オキ市川イチカウ  
多門タカドと云ふ者モノ末加マカ乃比ノヒ礼レイと云ふ書我著アスして大オホ難ナムじいを  
翁ウラハ末マと葛花クズバナと云ふ書ヲ以テ打返ウチカヘさス。故ユヘ多門タカドのニあらるニ  
世ヨ頑儒クワンジュ之ノを嘴クサシ我閉トホ申マい。

放伐ハウバツ事コトハ藍田ラムデムの東トウ龜年キネムの湯武論タウブロム蘇東破ソトウバの武王論ブワウお  
ども有レ之レ由承レい。猶此ナラニ弁ベ七平田翁ヘイデノウの玉襪タマダシ樞園翁シュエンノウの童子ドウジ  
問答モンタウおと小悉ツツサ小記キサイ載有キ之レい。

又儒教ジュケウを排斥ハイセキせらるルと云ふヲ。荻生チキフソ岨ライダ味ガイ太宰サイ春臺シュンタイおとい  
俗儒ゾクジュ有テ漢土カンツを中華チュウワと称シい。皇朝クワンテウ我自オソカら東夷トウイと書シ。或  
上ウ古コ乃ノ。天皇テンテウ方乃ハツノ御上ミカミ我忌憚イヒハカらル。論ロムを奉ホウりて書クふも著アス



しい故其悪習の泥酔哉覺知させんとく大喝一聲叱咤せら  
せざる更小ていこも譬バ岐路小迷入こらん人の正路ぞと  
思ひ違へて遙小行過こるを本道字知らせむとあ高聲に呼  
返矣母等しれい當今の本學者といふも終ハ己の矮身小し  
て微音の届かざる程哉必知らでい津後高聲よ呼んとはる  
と禪語小所謂粥飯の熱氣小て却て他小怪束れ悪はる、事  
情哉知らぬ故小い乍然此高聲に呼返さる驚のさまで立返  
りしを利名分の筋大に開け 皇朝の古史哉詩よ詠じ倭魂  
あど云ふ事哉口實小唱余 天朝を尊奉する儒風小變じい  
れ全く此翁又平田翁の大功小い。

殊小此二翁也 皇朝學の爲小身命哉擲うちて勤勞せ  
らまし事小い牙むあ末く、素縁世人乃誹謗ぐらゐる字  
顧らる、暇々何處ぞとし事と覺えい。

問 上古の更を暫く置て古更記日本書紀撰述有としを利  
尔來千百五六十間の間 皇朝學哉唱ふる人も多く出可申  
に只本居平田二氏は注意趣を以のこ御答有之いを以のあゆ  
ゑ小ていぞ。

答 古代は學問よ 皇朝漢土は差別之無之い其譯之先づ  
職原鈔り大學寮者四道儒士出身之処和漢最爲重職紀傳明  
經明法算道謂之四道と又曰凡四道者第一等秀才云紀傳第







上菅原高平元慶二年より從五位下善淵愛成延喜四年より橘朝臣仲遠等にか勅を奉じて講せらる。又其講筵小預とし人々は講竟れて後其書中の人物の名を抄出して題とあふ。各其題を賜りて詩歌文章を奏上志。絃歌酒宴有之を日本紀竟宴と申い。

猶菅家江家清家の人には國典を著し玉ひたる多く檀林皇后乃學館院藤原氏を勸學院源氏の辨學院和氣氏弘文院菅家れ文章院等も和漢を分と爲學校小て今世の如く和學者漢學者と一方に黨し互小其非を難はるるをうの夏ハ上古を無之夏小い。

問。さかど上代は和漢合一乃學問ある夏の明證も有之い。尔後世の儒者は國典を和語に訓夏を好まど和歌を詠せ矣。和文を作らば偶歌をよこ文を作るも語格小疎く假字格を知らば和學者は經書小うとく詩文を作らばや、も此れを氷炭の説を起して互に誹謗致はひい其由縁を承度い。答。上代々上下の等級正しく君臣の名義順逆内外の道理明らかある學風小てい處文運年小開け才學次ニに出い。と利遂小其學が方に於きて固執を僻學起り彼を慕ひ此を疎し外を尊内を卑ざる惡弊小押移り春秋の書法小違へ。亦孔子は罪人ど後多く相成申い先林羅山ほどの大儒さへ。



本朝通鑑を撰むる、折吳太伯の説、我取らまひを西山公お  
れ字議して止させ玉ひし由、まゝ荻生岨、峽が孔子乃肖像は  
上小日本、因夷人物、茂卿拜手、誓手敬題と書し、門人春臺が夏  
を前小申し如くに、此一派は學風を殊り名分小暗くい、  
又澁川春海は新蘆面命と云ふ書中、小伊藤仁齋の紀伊殿へ  
奉りこる書也として載有之、實小驚人ある文、躰小い。

天無二日と申し、が日本小々二日有之、小をりて號令一  
おらば、宜く、帝位我む將軍御踐おさま、天子我バ大  
和公小被成ひ、るうに云こ。

此人、清和天皇以来の御諱、我犯して、號を仁齋とつまこる

も、天朝を畏はざる不敬、乃趣平田翁論じ置れい。

又新井白石の讀史餘論、室町家代ニ將軍の事と云ふ條小、

世態既小變ぢぬま、其變小よりて、一代乃禮我制に履

し、是則變通するの義あるへし、若此人、足利義滿、字して、

不學無術あるらまし、のむ、此時漢家本朝古今の時制

我講究して、其名號を立、天子我下る、夏一等小して、

王朝の公卿大夫士、外を六十餘州の人民、悉く其臣民

あるべき制あらば、今代小至るとも、遵用は便有るべし、

云こ

情此文意、我考いに、義滿は託して、即今已は變通の礼制、我行



んと思ふ下心シタゴコロ我述ニクとりとおおしくい。又タトヒ從令シテ義滿ニ學術ヲ卓越トスとて一代の礼レ我制ヲをとも 皇祖ニ天神ノ以テ而シテ許ルし玉ふべ支。實ニ母ノ嗚呼トある申條ニい。又此人ノ義滿ノの使ヲを明國ニ遣ハシて其封爵ヲ我受ケ臣トと稱シテ彼ノ年號ヲを用ヒし無礼ノ不義ノ憤惋ノ不レ堪ハ支ルあるを何とも議セざるをいのみぞや且其著シたる折ヲ焚柴ヲ我見ル小御政道ノの上ニ就テ封書ヲ我獻セし支度ニあり。いのおる建言トモもあり々む大江ノ廣元ヲを論シて柔佞ト多智ト義時ノの亞ニあるべしと書シてし。今廣元ノ小百倍トをシ開闢以來の大罪ト我筆底ニ小含メてシ術ヲ恐ルべく憎ムべ支ルい。近クを帆足ト萬里ヲ入學ノ新論ト小。

神道云ニ蓋シテ神武帝ノ之所ニ作リ以テ鎮服ス中州ノ頑民也云ニ。此書一閱シて憂憤ノ堪ハ地上ノ擲ンとしいハ志ガ皇神等ニ御名ヲ書載有之ハ故ニ其儘ノ小キし置キ只慨歎スるハのハにシいハ様ノ賊儒ト上古ノも有之いハ志ガ大學ノ察ニて菅江清和ノ乃真儒トさハいハかハ評ズ玉ニふらんハ當今ノも少シし名分ヲ我知ルことらん學士トを室内ニも入ルを申スまじくい。

猶此趣ヲある支ルごもを書著シてシ頑儒ト多くいハを愚老ノの倭錦ト小舉テ悉ク論シ置キ牙トごも今ヲ略シ申スいハさて如ク斯ニ神典ヲを説曲ト。帝道ヲ我輕蔑スる小人ノ儒ノ邪説トモ也ト荆棘ト王道ノ小繁茂シ朝敵ト宮闕ノ小射向スふ等シク



以故荷田岡部本居平田の諸大人敏謙もて驅除し筆鋒  
えて討伐せらる、處小い今 神州の形勢内小を御政  
躰乃普く振起しのご支成慮らる玉い外小ハ戎夷の覬  
覦を憂はさせ玉ふ折のら久しく外教小心醉して我古  
傳説字敬信をど本跡の妄誕小惑溺志て 皇神の大道  
戎清乱志加之祓教月ニに浸淫志る何を以の 神州戎  
保護しいそん有主而虚者觸之應無主而虚者觸之乱と  
申度もいへむ固有の神徳を興起して主心を充實せし  
むるを村外の急務と有之おじ九い實小近世本學尊信  
此人と楠公新田兒島名和菊池土居得能三角櫻山等

の微こふる 南帝小仕才奉りて精忠の志操戎變せら  
まごごとしり等しく一旦本學小志を傾け玉いし貴所お  
どの他の議論乃爲よ躊躇し玉ふと赤松大友等の叛心  
志て足利氏よ属をばよいと志くやいそん一將小ても  
得がご支時節小い故何ごら御才器戎惜みおく失敬申  
度小い

同じ儒流もても栗山潜峰純

近學隨市井文不振乎播紳悽乎舊典不之顧或呼元明為  
中華自稱為東夷殆幾乎外視万世父母之邦而無蔑百王  
憲令之著矣



又山崎美成也。

享保元文成經て文章の躰格唐土尔愧也と云ふ處し蓋  
古昔の文を浮薄巧麗成れみ更と志て文辭を拙あけま  
ども名分成謬る事あり近來小至てて文法正しく修  
辭巧ある物より称呼の妄りぬる更尤多しあど云い  
え不かれ玩味せべ更小い。

猶伊勢安齋の呵純村田氏の作文通弊あど御披閱いべ  
し又山崎闇齋淺見綱齋蒲生秀實谷重遠佐久間大華峽  
門あがら湯淺常山武學者小こハ松宮觀山其外古道集  
語小載とる人こも其魂外國へ飛去らぬ君子は儒風小

ていべし乍然此人に小ても。實祚を崇稱志奉んとさ

は万古一姓と書ざるを無之いぬ。皇國之 皇弟親王

方小ても姓を賜はは時々人臣小列し玉ふ御制小て吾

天子に御姓と云ふ物あらばといふ更小心附ざるハ

全く革命の因風小心醉志とる陋習は醒ざるゆゑよて

いとどや岩垣松苗の 皇統一系と書とるを宜くい

孝格天皇の御製小。

敷島は倭錦小おりてこそから紅の色もたえりま

此聖旨我奉戴して漢籍學小闕とる人々殊更尔 皇邦の御

政躰を輔翼し奉ん更を可心懸更小い。



又 菅神に御遺戒小。

凡神國一世無窮之玄妙者不可敢而窺知。雖學漢土三代周孔之聖經革命之國風深可加思慮也。

凡國學所要雖欲論涉古今究天人其自非和魂漢才不能闕其闕奧矣。

此御文中小和に魂漢才と書き玉ひこる御深意能能玩味熟察して先於倭魂我固免て後廣く漢籍を涉獵して智見我開文學術研精をべき道理我覺知被成度更小。問。學友申聞い本居平田二氏の著書どもを披見いて不審乃件ニ不少いよ付貴面を得て問話致度由小い不苦いむ。

近日同伴致し御高話承度い。

答。愚老儀近來眩暈症ふて他と對話おご致い更甚難遊小存い加之生得暗弱訥辨ある小老懶忘失いと議論おどハ一向小出來不申素と信を不信よ不求知已我千載小待覺悟小ていへむ世小銜い心底毛頭無之い殊小幼年と村貧困此中に成長致いて書見おど勉免い暇も無御座いひし故漢文乃書我讀得不申甚苦心仕いさきと書机小うとくて過志悔しきと老るや子ら我おもい志る能ん。老の眼小疎きと繁々に悔し我ハ書見ぬ子らを見ふ目おとけまねどはぶ屋まで子と我小も漢學我勸米い更小いされば此答中小引



この語ど最も切あらぬも可有之文義も前後混乱致い  
し宜九御推讀可被下い

明治二年己十月

柴田花守

此一とちを家翁乃或人并問小答可られこの假初の考  
さ我あ跡を何人同志れぬきの速ともかして板尔惠  
能むむこま已り浪花若放や芝村にあとらへおふせと  
泥々社ども是計め物物以かあらね思ふ流のあら折  
布し岩崎翁我相見て契を流はけるういたくめあ御  
里れる大學大博士平田大人おき見誘られある身大  
人もいこと志望悦社こと九書肆よむり利てよと勸告  
らまされバ屋のさかく物たる夏とは成にとあ

男 警守

いふやあまひはきよとからんあを傳  
まつを来るあまひはきよとからんあを傳  
條取あまひはきよとからんあを傳  
識者あまひはきよとからんあを傳  
つふふあまひはきよとからんあを傳  
くまあまひはきよとからんあを傳  
まはあまひはきよとからんあを傳  
こまあまひはきよとからんあを傳







明治三年九月

官許

製本發行所

尾張名古屋

永樂屋東四郎

同

萬屋東平

伊勢津

篠田伊十郎

信州飯田

肥前長崎

小埜左右助

薩摩鹿兒嶋

青本泰輔

東京

須原屋茂兵衛

西京

池村久兵衛

同

北村四郎兵衛

大坂

中井源兵衛

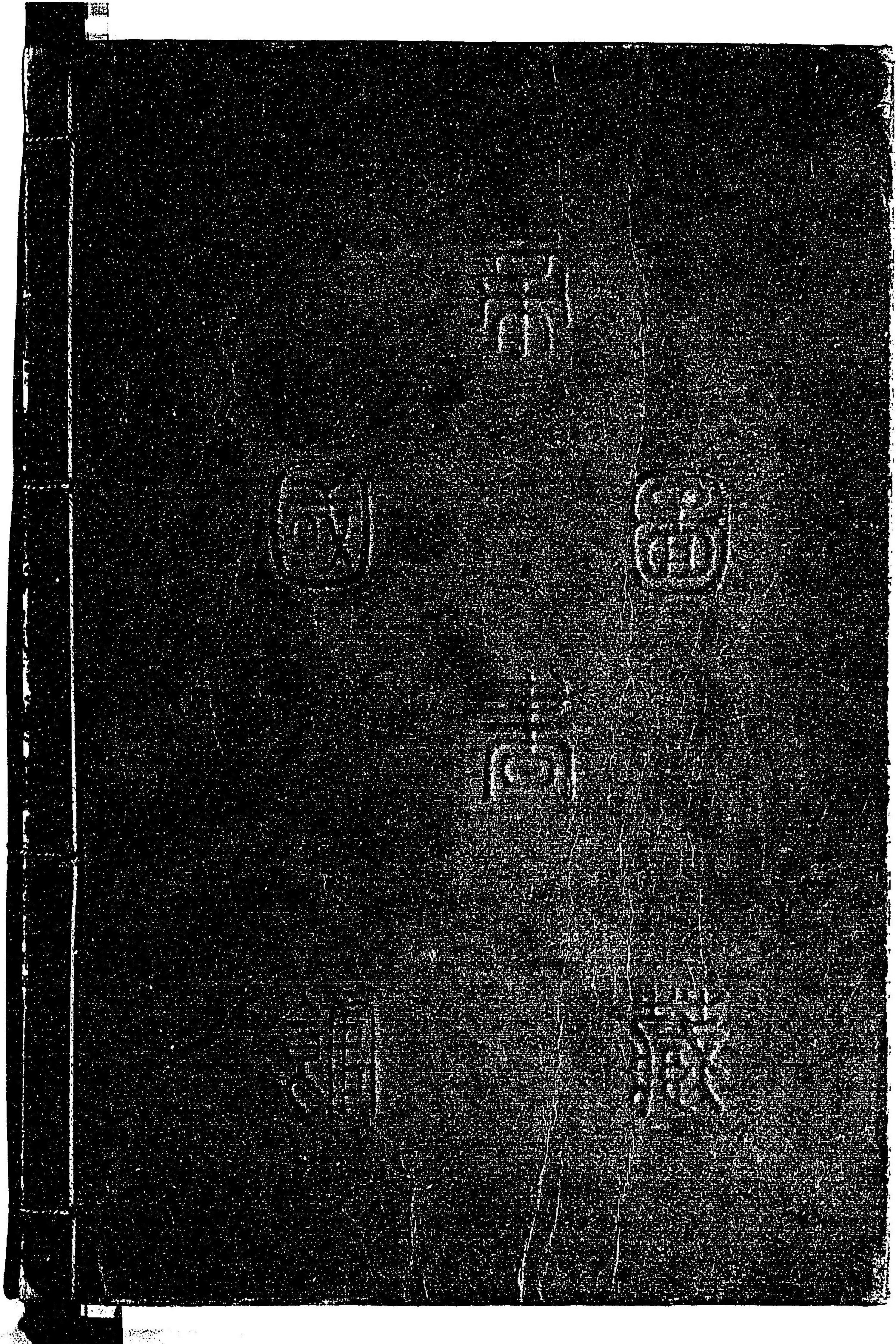
同

秋田屋太右衛門



8  
173







014019-000-0

8-173

古道或問

柴田 花守/著

M3

ABB-0272

